『和泉式部日記』の語り手の様相

菅原領子

一　はじめに

『和泉式部日記』は今日、和泉式部自作とする見解に落ち着いている。作中では、和泉式部とおぼしき主人公が、帥の宮との共感に根差した愛情を深め、やがて宮の邸に召人として入るという顛末を迎えるが、作者は明確に和泉式部自記という形を取らず、時に主人公の見聞の及ばない範囲の出来事や人物の心中にまで筆を致し(一)、また主人公に対し「女」という三人称をも用いている。このことから、『和泉式部日記』は物語的であるという評がしばしばなされるのであるが、それではその物語的な作品を語る語り手は、どのように設定されているのであろうか。

また、『和泉式部日記』の最善本とされる伝本は三条西家本であるが、これと比較的対立的な位置を占めるのが応永本系統諸本である。この応永本は、題号を「和泉式部物語」とし、「女」に対して敬語を用いる部分があるなどの特徴を持つ。和泉式部自作の観点からは「女」に対する敬語は不自然であるが、そういった異同も中世における本作品の享受の跡とするならば、そこからは「物語」を語るどのような語り手の姿が読み取れるであろうか。

日記文学の語りについては先学の研究がなされている(二)が、ここでは、より日記的と言われる三条西家本と、より物語的とされる応永本とのそれぞれの語り手が、どのような様相を見せているかを具体的に検討してみたい。

二　具体例における語り手の様相

作品は、三条西家本・応永本共に、語り手が主人公の視線・心中に寄り添う形で始まる。

(三条西家本、以下（三）と略記）夢よりもはかなき

世の中を嘆きわびつゝ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築地の上の草青やかなるも、人はことに目もとゞめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、誰ならんと思ふほどに、故宮に候ひし小舎人童なりけり。（一一頁）[三]

（応永本、以下（応）と略記）夢よりもはかなきよの中をなげきつゝあかしくらすほどに、はかなくて、四月にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。はしのかたをながむれば、ついひぢのうへの草のあをやかなるも、ひとはことにめとどめぬを、哀にながむるほどに、ちかきすいがいのもとにひとのけわひすれば、誰にかとおもふほどに、さしいでたるをみれば、故宮にさぶらひしことねりわらはなりけり。（九頁）[四]

冒頭部、いずれの本文においても、「夢よりもはかなき世の中」を嘆きながら暮らしている主人公と語り手とは、重なり合っている。「築地の上の草青やかなるも、人はことに目もとゞめぬを、あはれとながむるほどに」は地の文ではあるが、単に物思いに耽って夏草をながめる行為の描写ではなく、生命に満ちる季節感とは対照的に憂愁に沈む主人公の、他人とは異なる自身への意識が浸透した表現となっている[五]。また、「故宮に候ひし小舎人童なりけり」も、透垣のもとに姿を現したのが、他でもない、追慕の対象である故宮に仕えていた小舎人童であったのだった、という主人公の感慨を反映していよう。この冒頭部を読む限り、主人公と語り手が重なり、更に語り手と作者とを峻別するだけの材料がないこの時点では、本作品が「夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつゝ明かし暮らす」主人公自身によって語り出され、書き出された日記文学と読まれることは動かないであろう。

しかし間もなく、語り手はしばしば主人公を離れることになる。

帥の宮が橘の花を贈ってきたのに応えて主人公が「薫る香に」の歌を返した直後、場面は宮の邸へと移り、三条西家本・応永本共に語り手はそちら側に移動して、

（三）まだ端におはしましけるに、この童かくれの方にけしきばみけるけはひを御覧じつけて、「いかに」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、／同じ枝に……／と書ゝせ給ひて、賜ふとて、「かゝる事、ゆめ人にいふな。すきがましきやうなり」とて入らせ給ひぬ。（一三頁）

と、帥の宮及び小舎人童の言動を描く。

帥の宮からは続いて「うち出ででも」の歌が贈られ、そ

れに返歌する主人公を、語り手は「(三) もとも心ふかゝらぬ人」(一四頁) とする。これは、『蜻蛉日記』が冒頭で「かくありし時すぎて、世中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで世にふる人ありけり」(六) と自身を語り、また『更級日記』が「あづま路の道のはてよりも、猶奥つかたに生い出たる人、いか許かはあやしかりけむを」と自身について記すのと同様、自記の日記文学であってもさほど不自然ではない叙述だが、本作品の語り手が、主人公と完全には重ならないことが既に意識されている場合、ここは語り手が客観的に主人公を描き出そうとする態度として読まれよう。

暫く文のやり取りを経た後で、宮は主人公の許を訪れようと思い立つ。そこでは「(三) 思ひがけぬほどに忍びて」(一五頁) と心づもりする帥の宮の心中のみならず、宮の侍者である右近の尉なる人物の「(三) さなめり〔あの女性の所へ行かれるのだな〕」(同) という思惟までも写される。こういった叙述は、この後もしばしば繰り返されるのである。

こうして語り手が主人公の側から離れた後、初めて主人公を指して「女」という三人称が使われる。が、そこでは三人称を用いて語り手が彼女から離れるのではない。宮の来訪をめぐる場面は、次のように語られる。

(三) 〔宮、来訪して〕「かくなむ」といはせ給へれば、女いと便なき心地すれど、「なし」と聞えさすべきにもあらず。昼も御かへり聞えさせつれば、ありながら帰したてまつらんもなさけなかるべし、ものばかり聞えん、と思ひて、西の妻戸に薫座さし出でて入れたてまつるに、世の人のいへばにやあらむ、なべての御様にはあらず、なまめかし。(一五〜一六頁)

(応) 「かくなん」といはせたまへれば、女いとびなき心ちすれど、なしときこゆべきにもあらず。ひるも御返きこえさせつれば、ありながらはかへしたてまつらんもなさけなし、物ばかりはきこえさせん、とおもひて、にしのつまどにわらうださしいでたり。いれたてまつるに、よの人のいへばおぼゆるにやあらん、誠になべての御さまにはあらずなまめかし。(一四頁)

突然の帥の宮の来訪に対する女の戸惑い、居留守を使うわけにもゆかず〔お話だけしよう〕と考えての対応が述べられるが、続いて宮の容姿が〔世間の人が噂するのを聞いているからであろうか、優美である〕と結ばれる。「(三) 世の人のいへばにやあらむ」という挿入句が、応永本で「よの人のいへばおぼゆるにやあらん」とあってよりはっきりするように、「なべての御様にはあらず、なまめかし」は宮の姿を初めて目にした女の心理に即した物言いとなって

いる。「女」という三人称に続く叙述ではあるが、語り手は三条西家本・応永本のいずれにおいても、女の視点に寄り添っているのである。前引の部分に引き続いて、「(三)これも心遣ひせられて、物など聞ゆるほどに、月さし出でぬ」(一六頁)とあり、「これ」が女を指すことからも、語り手の現在の位置が顕在化する(七)。

やがて室内に入った宮はあれこれと女に囁くが、三条西家本ではその行為を「いとわりなきことどもをのたまひ契りて」(一七～一八頁)とし、応永本では「いとわりなき心地すれどいふかひなきことどもをいひちぎりて」(一五頁)である。森田兼吉氏(八)の御論によれば、ここは寛元本ともほぼ一致する応永本本文の方が信用がおけることになるが、そもそも女は、宮の突然の訪問に戸惑っており、宮と話をする過程でも、「(三)あやし、今宵のみこそ聞えさすると思ひはべれ」(一六頁)、「(三)夜とともにぬるとは袖を思ふ身ものどかに夢を見る宵ぞなき／まいて」(一七頁)と、宮の口説に対し、あくまでも控えめに応対している。そこへ更に強引とも言えるなりゆきで室内に入られたのだから、応永本が言うように「わりなき心地」がするというのは自然であるし、その上で宮が語った言葉を「いふかひなきことども」と表現する語り手の姿勢も肯ける。それはまた、後に宮と女との交渉を、しばしば「はかなし」「よしなしごと」等と捉える姿勢にも通ずるようである。

この初めての逢瀬の翌日、文使いの小舎人童が女の邸に姿を見せるが、宮からの文を携えてきたわけではなかった。故宮への追慕に明け暮れる日々であったのが、今またその弟である帥の宮の愛情を受け入れる身になったことに思い乱れていながら、童の姿を見ると宮からの文を期待し、その期待が外れたことを「(三)心うしと思ふ」(一八頁)女の心の動きは、「(三)すきぐしや」(一九頁)とされる。語り手の批評が、初めてはっきりと表れた部分である。宮の邸に戻る童に託して女は「待たましも」の歌を贈るが、それを受け取った宮は、女の気持ちは汲みながらも、北の方の思惑や世評を憚り、訪問を思い止まる。それに対して、語り手は「(三)ねんごろにはおぼされぬなめりかし」(一九頁)、「(応)いとねんごろに覚さぬにぞ」(一七頁)と、ここでも批評を顕在化させている。

やがて宮が女を二晩続けて連れ出し、他所で逢瀬を持つことがあり、その場所は宮邸の一隅であろうと推測されるのだが、その二晩めに、「(三)上は、院の御方にわたらせ給ふとおぼす」(三二二頁)という一文がある。これが宮の北の方の側に語り手が移る最初であるが、特に前後の文と密接な脈絡はない。作品が始まって間もなく、宮と北の方との不仲についてふれられていたが、他ならぬ宮邸内での逢瀬に際し、北の方の存在が否応なく意識される語り手のあり方を示していよう。

この逢瀬の後、宮から消息があり歌の贈答が行われるが、宮の「わがごとく」の歌に対し「一夜見し」の歌を返した女は、月をながめ、物思いに耽ったまま夜を明かす。その経緯は、「(三)一夜見し……／と聞えて、なほ一人ながめゐたる程に、はかなくて明けぬ」(三四頁)と述べられる。「はかなくて」は夏の短夜でもあろうが、それよりも諸注が指摘する[九]ように、返歌を受け取った宮が来訪するのではないかとの密かな期待が女にはあり、結局それが虚しかったことを言う、女の心理が浸透した表現であろう。

このはかなく夜を明かした次の日に宮が訪れるが、あいにくと女側にはそれが伝わらず、宮は他の男がいるものと誤解して帰ってしまう。そのため宮から疑い・恨みの消息がもたらされ、詳しい事情のわからぬ女は敢えて弁明せず、「(三)逢ふ事は」の歌を返すが、宮の心は解けない。応永本ではここを、「あふ事は……ときこえさするも、なをまどをになむ」(三四頁)として文を切る[十]。会話体で主に用いられる「なむ」が地の文に表れた例である。〔久しく消息も下さらなかった宮がやっと歌を贈って下さり、それに対して返歌もしたが、それでも宮のお疑いが晴れたわけではなく、やはりしげしげとは通って下さらぬのでした〕という女の気持ちに即した嘆息が窺えるような語りである。

宮からの消息はこうして途絶えていたが、月の明るい夜、女の方から「月を見て」の歌を贈ると、宮はやって来た。「(三)例のたびごとに目馴れてもあらぬ御姿にて、御直衣などのいたう萎えたるしも、をかしう見ゆ」(三七～三八頁)という宮の描写は、その姿を〔目馴れた様ではない〕と感心している、女の目を通してなされている。先にふれた、初めての来訪の際に宮の容姿を「(三)世の人のいへばにやあらむ、なべての御様にはあらず、なまめかし」と述べたのと同様である。一方の女は、すぐに帰ろうとする宮を「こゝろみに」の歌で引き留め、その様子は「(三)人のいふほどよりもこめきて、あはれにおぼさる」とされる[十一]。「子めく」は清水好子氏が指摘される[十二]ように、おっとりした様子を肯定的に形容する語であり、宮の側から見た女の魅力が表現されている。

その後、人々の噂からまたも宮は女の多情を疑い、途絶えを置き、また七夕の贈答、夕暮れの来訪などを経て、地の文で女と宮との交渉が振り返られる。

(三)あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなし事に、世の中を慰めてあるも、うち思へばあさましう。(四四～四五頁)

女が繰り返し宮から疑われるなど、時に停滞しながらも女と宮との間は折にかなった贈答によって深まりつつある。

世人がどのように噂しようと、女の側では七夕に便りを寄越す多くの「(三)すきごとどもする人」(四二頁)も全く相手にせず、恋愛の対象としては宮だけに心を傾けていたはずであるが、しかしここでは、そういった交情も実は虚しいという。地の文ではあるが、「うち思」う主体は女であり、語り手と女とは完全に重なっている。このように重い意味を持つ感慨がこういった形で表出されるところに、この作品の語り手の特徴が表れていよう。

十月、女と宮の独自の歌語「手枕の袖」をめぐる贈答が繰り返され、二人は共感を深めていく。もとは「手枕の袖」を詠み込んだ宮の歌に、思い乱れていた女が返歌できず、それでも「(三)よし見たまへ、手枕の袖忘れ侍る折や侍る」(六〇頁)と冗談に紛らして返事をし、その後確かに女の方から「手枕の袖」を詠んだ歌を贈ったのであった。これを宮の方でも「(三)「忘れじ」といひつるを、をかしとおぼして」(同)、女の贈歌と同様に「手枕の袖」を結句として返歌する。そしてその次の歌にもやはり「手枕の袖」を詠み込んで贈った。そのことが、「(三)この袖の事は、はかなきことなれど、おぼし忘れでのたまふもをかし」(六五頁)と評価される。先の宮の思い、「「忘れじ」といひつるを、をかしとおぼして」に対応するこの感想も、女の心中に即した視点から語られている。

同じく十月、霜をめぐって歌を贈る早さが競われるが、宮が文使いの小舎人童を召している間に、女から「手枕の」の歌が先に届いてしまう。

(三)つとめて、例の御文つかはさんとて、「童参りたりや」と問はせ給ふほどに、女も霜のいと白きにおどろかされてや、／手枕の……／と聞えたり。(六五頁)

「女も……おどろかされてや」の「や」を文字通り受け取るならば、語り手が女の行為の動機となっている心の動きを外から叙述する、珍しい例である[十三]。

また、「言の葉ふかくなりにけるかな」「白露のはかなくおくと見しほどに」の連歌の段では、宮の姿が描写されるが、ここでも女の視点が語り手に浸透している。

(三)宮の御さま、いとめでたし。御直衣にえならぬ御衣、出だし袿にし給へる、あらまほしう見ゆ。目さへあだ〳〵しきにやとまでおぼゆ。(七二頁)

「あらまほしう見ゆ」るのは女の目からであり、「目さへあだ〳〵しきにやとまでおぼゆ」る主体もやはり女である。これまでにみた、宮の容姿を述べる条と同様の様相を呈している。

やがて宮は、またも女を外へ連れ出して逢う。しかも今度は四十五日の方違え中であるため、連れ出した先は宮のいとこの邸であり、そこの車宿りで女を車に乗せたまま、自身も夜になってから車に乗り込む。周囲を事情を知らぬ宿直の男たちが歩き回るという、危うい状況の中、宮は濃やかに語らうが、その感情の高ぶりを、語り手は「(三)あはれにもののおぼさるゝまゝに、おろかに過ぎにし方さへくやしうおぼさるゝも、あながちなり」(七八頁)と批評する。

作品も終末部(十四)が近くなり、最後の贈答となる初句揃えの「呉竹の」の歌は、宮が何故か「心細きこと」を言い出したのを受けて詠まれたものであるが、その経緯は次のように語られる。

(三) いかにおぼさるゝにかあらん、心細きことどもをのたまはせて、「猶世の中にありはつまじきにや」とあれば(九七頁)

これよりも以前、宮は突然出家の可能性を仄めかし、女は衝撃を受けている。ここの「心細きことども」もそれに類した内容であったかと思われるが、語り手は宮の心理にそれ以上踏み込まない。先に宮が出家を口にした時には女が思い乱れて泣いたり、衝撃を訴える女の歌とそれを慰める宮の歌との贈答が行われたりと、二人の間に様々な影を落としており、この時点でも「心細きことども」の内実は女にとって重要な意味を持つと考えられるが、「いかにおぼさるゝにかあらん」とだけで簡略な叙述がなされている。結局は宮の出家が実現しなかったことを既に知っている語り手が、先を急いだともとれる。

いよいよ女が召人として宮邸に入ると、当然ながら大きな波紋が起こる。宮と北の方との仲はますます冷えて遠ざかり、また北の方付きの女房は、正月、院の拝礼に集う廷臣を見物する代わりに、女の姿を見ようと隔てに穴をあけたりする騒ぎとなる。「(三) 上の御方の女房出でゐて物見るに、「まづ、それをば見で、この人を見ん」と穴を開けさわぐぞ、いとさまあしきや」(一〇一～一〇二頁)という女房たちの態度の批判、「(三) かゝるも、いとかたはらいたくおぼゆれば、いかゞはせん、たゞともかくもしなさせ給はんまゝにしたがひて候ふ」(一〇二頁)の「いかゞはせん」という諦念は、語り手が寄り添う女の心中のものであろう。あとは主に北の方付き女房による宮への非難や、宮邸から退去することを決意した北の方の言動等が語られ、冷え切った宮夫婦のやり取りを最後に、実質的に作品は終結する。末尾の一文、「(三) 宮の上御文書き、女御どのの御ことば、さしもあらじ、書きなしなめり、と本に」(一〇五頁)は書写者を装い、北の方やその姉の春

宮女御の消息の内容までは責任を負いきれないと作者が断ったものであり、これまでに見てきた語り手の働きの範囲からは外れよう。

三　応永本の女に対する敬語

応永本では、主人公と帥の宮との交渉の始まりに際し、宮が贈ってきた橘の花に対して、作品中初出の歌を主人公が「さしいだし給」（一一頁）と、敬語を用いる形で、語り手は主人公との距離を取る。

そして、帥の宮からの返歌を受け取った主人公に対し、「をかしとみれど、つねにはとて御ふみもきこえたまはず」（一一頁）と、再び敬語で遇している。ここに至って、応永本では時に主人公に敬語を用いて語る、物語的様相を呈していることが読み取れるであろう。

また、宮が初めて女の許を訪れた場面で、宮が妻戸の外から中へ入れてもらうべく女に話しかける部分では、三条西家本では「かろ〻くしき御歩きすべきにてもあらず。……」（一七頁）と、一種の自敬表現をとっており、問題になるが、応永本は「かろ〻くしき有（あり）きなどすべきにもあらず」（一五頁）で問題はない。そして応永本ではここは「なさけなくはおぼすともとおぼして」（同）と続く宮の心中思惟であり、女は宮の心中で「おぼす」で待遇されていることになる。直接女に宛てて口に出された言葉や消息の中では、宮から女への敬語は何ら不自然ではないが、心中思惟としては、二人の身分差から考えてやや不自然である。前にみた、女に対して敬語表現を用いる応永本の語り手の性格が、ここにも反映されていると考えられよう。

八月に入り、女は石山に参籠する。そこへ宮の文を託された小舎人童は、はるばる石山まで出かけるが、三条西家本が「石山にゆきたれば」（四五頁）であるのに対し、応永本では「いし山にまいりたり」（四三頁）となっている。小舎人童は石山寺に参詣するために出向くわけではないから、「まいりたり」はそこに籠もっている女への敬意を表した表現と読める。

これらの女に対する敬意を表す敬語は、作品の始めに二例続いているなど、単なる誤写としては片づけにくい。物語の登場人物がいわゆる中流である場合、周囲の人物との相対的な関係で、敬語を用いられたり用いられなかったりするのは周知のことであろう[十五]。本作品では女は殆ど宮と相い対して語られるため、女に対する敬語が用いられやすい場面は少ないはずである。が、それでも応永本においては若干例が指摘されるということからは、その本文が、女が敬語で待遇され得るような、物語としてこの作品を受け止めた享受者によるものであると解釈できよう。

なお、五月頃、女の許へ行こうと宮が支度をしている所

へ、侍従の乳母なる人物がやって来て長々と諫めるが、そのせりふは「(三)と聞え給へば」(二九頁)、「(応)と申給」(二六頁)で受けられ、いずれの本文においても女房クラスの人物に敬語が用いられているのも注目される。

四　おわりに

『和泉式部日記』の語り手は、時に主人公から離れて帥の宮やその周辺の人物の思惟や言動を語る。特に応永本の場合、数例ではあるが主人公に敬語を用いることで、語り手と主人公との距離を作品の始めからよりはっきりと意識させる本文になっている。

この応永本の敬語は享受者の手が入っていると考えられるが、それ以外の点で作者が設定したと考えられる、主人公と距離を持つ語り手には、どのような様相が見出せるであろうか。

本作品は『蜻蛉日記』や『更級日記』のように、かつての自分を振り返り、自身を規定する「かくありし時すぎて、世中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで世にふる人」「あづま路の道のはてよりも、猶奥つかたに生い出たる人」といった表現は冒頭になく、作品中の時間の現在時に語り手が身を置き、主人公の内面に添って語り始める。そのことで、憂愁に沈んで日を送る主人公自記の日記文学としばらくは読まれるのであるが、やがて主人公の見聞の及ばないはずの範囲に筆が及び、物語的様相を呈する。その語り方が、物語の全知的視点を貫くことにはならず、主人公の内面が深く細かに写し出されるのに対して宮のそれは比較的手薄であることはすでに様々な角度から指摘されているが、ともあれ主人公の側からの叙述に終始しないことによって、作品の主題である主人公と宮との恋愛の進行と成就を、より奥行きのある形で描き出すことには成功している。また、主人公を指す「女」という三人称も、結局一人称的な主語に終始する(十六)ものの、語り手が主人公を客体的に捉えようとする姿勢の一端とは認められる。

しかし、地の文に主人公の心中が浸透している例もしばしば見受けられる。作品の性格上、手放しで賞賛しても差し支えないはずの宮の容姿一つをとっても、「世の人のいへばにやあらむ」と挿入し、また「をかしう見ゆ」「あらまほしう見ゆ」「目さへあだ〳〵しきにやとまでおぼゆ」と、宮に相い対している女の目を通した描写であることが顕わになっている。「なほ一人ながめゐたる程に、はかなくて明けぬ」の「はかなくて」には期待が外れた女の虚しさが込められていようし、「あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなし事に、世の中を慰めてあるも、うち思へばあさましう」は「うち思」う主体である女をはっきりと意識させる。こういった例から考えると、一方で故

宮との思い出に浸り現在の我が身を顧みながら、他方で宮からの文がないことに落胆する女の心の動きを「すきぐしや」とするのも、主人公を客観的に突き放した語り手の評言というよりは、主人公―作者の執筆時の反省がふと表れたものと読めてくる。「上は、院の御方にわたらせ給ふとおぼす」という一文は、宮の邸で忍び逢う場面で、作者が北の方の存在を意識せずにいられなかったことの反映と思われるし、「あはれにもののおぼさるゝまゝに、おろかに過ぎにし方さへくやしうおぼさるゝも、あながちなり」は、それまで幾度となく宮から疎遠にされたり疑われたりした経緯を綴ってきた作者が、〔かつてはそのような仕打ちもなさったのに……〕との気持ちをもらしたのであろう。

「女」という三人称も、出現する頻度に偏りがあり(十七)、全部で十六回使用されているが、女と宮の間が大きな転機を迎え、深い共感に達する十月十日頃の「手枕の袖」の場面までが十三例、その後終末部の前までに三例、女と宮以外の人物が多く登場する終末部には全く用いられない。「女」が真に客観的呼称を目指したものならば、多くの人物の中に身を置く主人公を「女」と呼ぶことがありそうだが、終末部ではむしろ、すでに宮と「同じ心」に達してしまった主人公は「たゞともかくもしなさせ給はんまゝにしたがひて」と、宮と一体化して、宮もろともに北の方側からの非難に耐えるだけなのである(十八)。このように、主人公を指す呼称として三人称の「女」が設定されながらそれが徹底されているとは言えないが、少なくともそのことによって、宮の目や心を通し、宮に恋愛と共感の相手として「(二)なほいふかひなくはあらずかし」(二七頁)、「(三)人のいふほどよりもこめきて、あはれに」(三九頁)等と評価され認められたことを描き出す――一人称の自記という形では困難な――ことが可能になったのである。

かくして『和泉式部日記』は、ある時は主人公を離れまた一方で主人公と完全に重なり合う語り手によって展開される、作り物語ではない、しかし物語のように語られ読まれる価値のある、帥の宮と女の恋愛の記録として享受されることになったと考えられる。

〈注〉

(一) いわゆる「超越的視点」による叙述。鈴木一雄・円地文子『全講和泉式部日記』(至文堂、平成六年改訂版)参照。

(二)石原昭平『平安日記文学の研究』(勉誠社、平成九年)第一章 四「日記文学における「とはず語り」の問題―物語的発想による私語りの様相―」、第四章 六「日記文学と物語文学―三人称の「語り」から一人称の「問はず語り」へ―」、森田兼吉「日記文学における語りの性格」(佐藤泰正編『語りとは何か』笠間書院、昭和五七年)等。

(三)三条西家本の引用は、清水文雄校注『和泉式部日記』(岩波文庫、昭和五六年改版)により、末尾に同書の頁数を示す。

(四)応永本の引用は、鈴木一雄・伊藤博編『影印本 和泉式部物語』(新典社、平成二年改版)の書陵部蔵本の影印により、末尾に同書の頁数を示す。また、私に濁点・句読点・括弧等を施した。

(五)このような主人公の自意識は後に出てくる手習文の中でも、「人はみなうちとけ寝たるに、そのことと思ひわくべきにあらねば、つくづくと目をのみさまして、なごりなう恨めしう思ひ臥したるほどに、雁のはつかにうち鳴きたる、人はかくしもや思はざるらん、いみじう堪へがたき心地して」(三条西家本による。以下、応永本との異同が論旨に関わらない場合は、三条西家本本文のみ掲げる)にも見出せる。

(六)次に引く『更級日記』共に、引用は新日本古典文学大系による。

(七)これに類した表現は、

・またの夜おはしましたりけるも、こなたには聞かず。(三五頁)

・その夜の月のいみじう明かく澄みて、こゝにもかしこにもながめ明かして(六五頁)

がある。後者の例は、文脈から「こゝ」が女側、「かしこ」が宮側を指すと読み取れる。なお、磯村清隆氏は、この場面について、「「女」という、第三人称化した呼称はあるものの、その実はほとんど第一人称的描写であり、以下の二人の言動や思惟は、その「女」の立場・眼を通して語られているのである」と指摘される(「『和泉式部日記』の〈語り手〉」『城南国文』第六号、昭和六一年二月)。

(八)森田兼吉「『和泉式部日記』三系統本論再説」(國學院大學院友学術振興会『新国学の諸相』おうふう、平成八年)、「『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない―『和泉式部日記』三系統論再読・続稿―」(『日本文学研究』三一、平成八年一月)

(九)早いものとしては、小室由三・田中栄三郎『和泉式部日記詳解』(白帝社、昭和三二年)等。

(十)三条西家本は「逢ふ事は……/とぞ聞えさする。/かくて後も、猶間遠なり」(三六~三七頁)である。なお、寛元本は「さて後も待とをになむ」(飛鳥井雅章筆本、吉田幸一『和泉式部全集 本文篇』古典文庫、昭和三四年による)。

(十一)三条西家本・応永本は「こめきて」が「うめきて」となっているが、「こ」と「う」は紛れやすく、寛元本に「こめきて」とあるのによって校訂される。

(十二)清水好子「和泉式部日記の基調」(関西大学『国文学』第五四号、昭和五二年九月)

（十三）但し、応永本にはこの「や」はない（六六頁）。

（十四）女が宮邸に入り、女と宮との贈答歌が全くなくなる部分を、便宜上終末部と呼ぶ。

（十五）『源氏物語』の浮舟が、女房や小野の尼君達にかしずかれている時は敬語を用いられ、薫や匂宮と共にいる場面では無敬語で待遇される等。

（十六）織田裕子「「和泉式部日記」の作者について」（『国語国文』第二七巻第四号、昭和三三年四月）

（十七）織田氏前掲論文参照。

（十八）拙稿「和泉式部日記の散文」（『国語国文』第六七巻第一二号、平成一〇年一二月）においてふれた。

（すがわら　りょうこ・研修員）